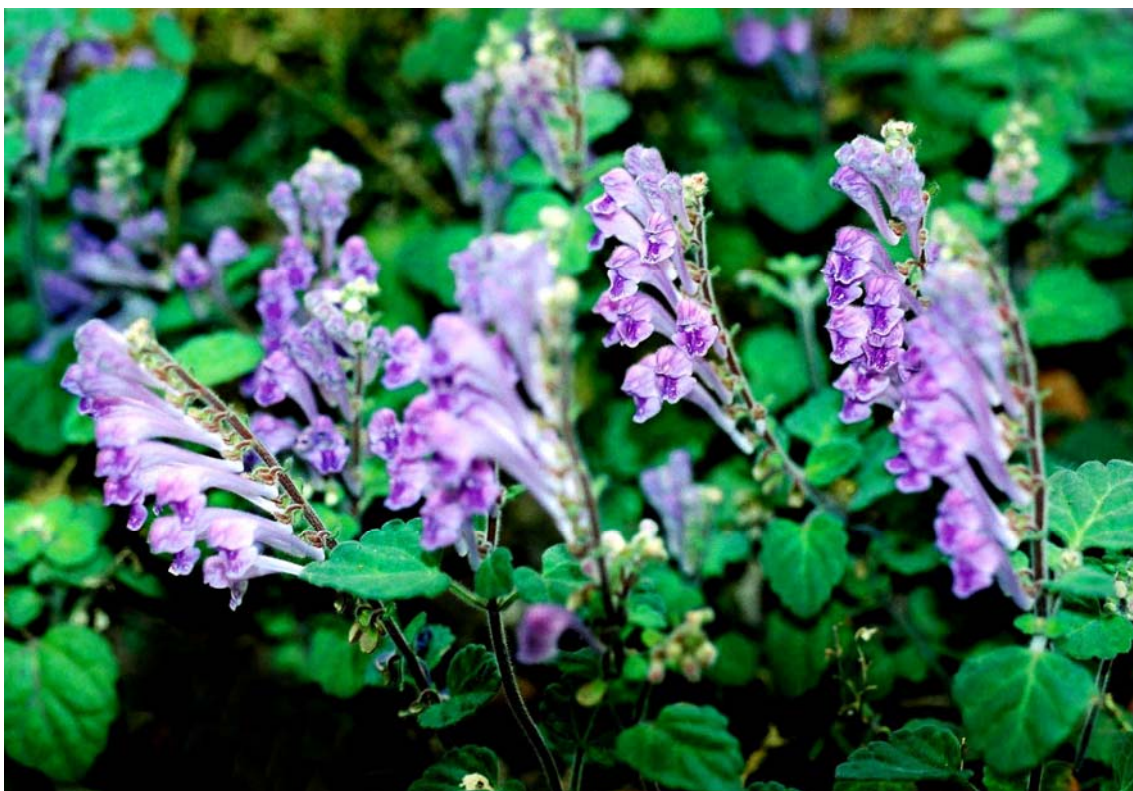


20) タツナミソウとコガネバナ＝立浪草と小金花

タツナミソウはシソ科の多年草で、本州福島県以南から、四国、九州、海外では朝鮮半島、中国、インドシナなどに広く分布する。またタツナミソウ属は世界には約 200 種があり、花が美しいために観賞用として栽培されるものも多い。一般的には草原や丘陵地帯に自生することが多く、茎は方形で直立し、高さは 20~40cm、白い長毛が密にある。有柄で心臓形の葉は対生し、葉縁には鈍鋸歯があり、晩春、茎頂に花穂を着けて、同一方向に淡紫色で唇形の花をつける。花冠は基部で折れ曲がって直立し、長さ 1.5~2cm で先端は二つに別れる。和名の由来は花が咲く様を波頭に見立てたものである。別称としてスイスイバナ、ヒナノシャクシ、スイモノグサなどがある。学名は『*Scutellaria indica*』で、属名は小皿という意味で、萼に丸い付属物があるため、これを小皿に見立てたものである。タツナミソウには変種が多く、伊豆半島以西の本州から九州の海岸近い山地に多いコバノタツナミソウ、北海道から九州の山地の木陰に生えるヤマタツナミソウ、福島県以西の本州から九州に分布し、やや湿り気のある木陰に生えるシソバタツナミソウ、本州、四国の丘陵地に生え、タツナミソウと比べると花穂が短く、葉が三角形に近い形状をしたオカタツナミソウなどがある。しかしどの種も可憐な花を咲かせるため、山野草としての人気が高く栽培されることも多い。また民間では根を強壯剤や通経剤として用いられていた。

同じタツナミソウ属の近縁種にコガネバナがある。草丈は 30cm ほどで、茎は直立し、匍匐茎を出してよく増える。夏、穂状花序でタツナミソウによく似た藤色の花を開く。原産地はロシアの極東地域から中国北部で、モンゴル、朝鮮半島にかけて分布する。学名は『*Scutellaria baicalensis*』で、種小辞はバイカル湖の意で、本種の原産地を表わしている。一方、和名のコガネバナの由来は、根茎の断面が鮮やかな黄色のためである。別称は葉がヤナギのように細いので、コガネヤナギともいう。

コガネバナは中国では『黄芩』(オウゴン)と呼ばれる大事な漢方薬だった。日本に渡来したのは、江戸時代中頃、徳川吉宗の時代で、朝鮮から種子が持ち込まれ『小石川薬園』、現在の小石川植物園で栽培されたのが最初である。根皮を取り除いて乾燥させたものを漢方では『黄芩』(オウゴン)といい、『神農本草経』(04-01-18 ツルボ参照)の中品にもその記述が見える。中品とは体力を養い病気を予防し虚弱な体を強くする効果があるものの、使い方次第では毒にもなる漢方薬の種類のことである。フラボノイド、ステロイドやアミノ酸を含み、胆汁の分泌をよくして、利尿作用や解毒作用、止血作用がある。このため古くから消炎、利胆、利尿、解毒、止瀉に用いられ、『女神散』、『乙字湯』、『黄蓮解毒湯』、『竜胆瀉肝湯』などに処方され、漢方薬の『ツムラ』から販売されている。漢方の常として黄蓮(オウレン=01-02-06)や竜胆(リンドウ=05-01-03)、山梔子(クチナシ=02-05-06)、連翹(レンギョウ=01-04-10)など、他のいくつかの生薬を配合して用いることが多い。



タツナミソウの花は確かに波のようにも見えるが、手招きしてるようにも見える。花序には変異が多く、すべてが浪のようになるとは限らず、変異ごとに名称が与えられている(栽培品)。



タツナミソウの花は正面から見るとこんな表情をしている。



紅花のタツナミソウ。花の色も形も変異が多く、上下に長い花を咲かせるもの、短い花のもの、陽向を好むもの、半日陰を好むものなどさまざまである(栽培品)。



白花のタツナミソウ(栽培品)



コガネバナの葉はヤナギに似ているためコガネヤナギとも言う。漢方では重要な生薬で「黄芩(オウゴン)」と言われ、他の生薬と配合されて用いられる(東京都小平市薬用植物園)。



アップしてみるとどこことなくユーモラスなコガネバナの花。



コガネバナとタツナミソウとは近縁種で、花が美しいため観賞用に栽培もされている。漢方では消炎、解毒、下痢、腹痛に用いられるが、有毒植物でもある(小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)